Howl of hound

島凪　智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈｏｗｌ　ｏｆ　ｈｏｕｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ４２７７Ｉ

【作者名】
島凪　智

【あらすじ】
高校二年生の月神俊輔は、悪友の陽山孝司と共にある日見知らぬ世界で目を覚ます。そこは世界の覇権を巡って国々が争う戦乱の異世界。
二人がその世界で見たものは魔術と異種族と――――――見上げるほどの巨大な人型兵器だった――
〈誰も信じることのない〉少年と〈何かを常に信じる〉少年が〈何も信じられない世界〉で紡ぎだす“ファンタジーロボットアクション”！！

《毎月不定期更新でお届けします。》

第一章　第一話　《ｓｔｒａｎｇｅｒ　ｓｉｄｅ》　始まりは突然訪れた／終わ

この物語はフィクションです。
この物語は視点変更型一人称（たまに三人称）でお送りします。
作者は素人の下手くそなのであまり期待しないで読んでくれると幸いです。

第一章　第一話　《ｓｔｒａｎｇｅｒ　ｓｉｄｅ》　始まりは突然訪れた／終わ

何も変わらない空、何も変わらない日常。
止むことの無い喧騒、楽しそうに笑うクラスメイトたち。
世界は動いていく。
たとえ誰かが欠けてしまったとしても。
世界は変わらない。
どこにでもいるような人間がいなくなったとしても。
世界は、変わらない。
無慈悲なまでに…変わらない。
イライラする。
まるで自分を見ているようで。
まるで――――鏡を見ているようで。

「…すけ。お…い…しゅ…け。……おい、俊輔！」
「…え？」
その声で現実に引き戻される。
いつの間にか僕は考え事をしていたらしい。
思考を一旦中断することにした。
…どうせあのままだったら自己嫌悪だから。
「どうせまた自己嫌悪でもしてたんだろ？」
うわ、バレバレだし。
「やめとけよ。いつか本当に病んじまうぜ？」
目線を上に上げて僕はソイツに言った。
「…余計なお世話だよ……孝司。」
そう言って目の前の学生…陽山　孝司のことを見る。
「人からのアドバイスを余計なお世話なんて言うなよ。」
「人からのアドバイスをどう解釈しようと他人の勝手だろ。」

そう言い返すと孝司は何も言い返せなくなってしまった。
その間に教室を見渡す。もうほとんどの生徒がいなかった。
……なんか若干外も暗いし。
「…ま、いいけどよ。お前今何時か分かってんのか？」
時間？　と僕は腕時計を見る。
僕の時計は父の形見で今時珍しいアナログ時計だった。
時針と分針は今が丁度６時であることを示していた。
「６時だろ？まったく何――――を」
……６時？
あれ？ちょっと待て。最後に意識があったのは何分前だっけ？
「あれ、ねえちょっと孝司。僕が起きていたのはいつまでだった？」
「ちょうど古文の時間までだったな。」
「までってことは」
「授業が始まった途端にボーっとしてたから井上のやつ、顔真っ赤にして怒ってたぜ。」
……なんてこった。
授業中ほぼ丸一時間上の空だったわけか。
まあ、井上先生には今度謝ろう。
「…まあとりあえずさ、一緒に帰らないか？」
孝司はそう言って僕の肩に手を乗せた。
僕はその手を退かしながら席を立った。
立って見るとやっぱり孝司は身長が高かった。
僕は孝司を見上げるような―（実際見上げているが）形で、
「……折角のお誘い悪いけどパス。」
断った。これ以上に良い断り方がなかった。
孝司がえぇ～といった感じで、
「なんでだよ。いいじゃねえか。」
我儘を言った。
「なんで僕が君の言うとおりにしないといけないのさ？」
僕は呆れたように、そして諦めたように聞いた。

それを見た孝司は、ニヤッと笑ってこう言った。
「そりゃ、言わなくてもわかるだろ。《悪友》？」

「…でさ。佐々木のやつがそこで三浦にドロップキックをかましてさ…」
結局僕が折れる形になった。もう勘弁してほしい。
こいつは他人の意志を尊重する気があるのか？
「……もうその話僕は聞いたよ…」
「そうだったか？あれ、おかしいな…」
おかしいのはお前の記憶力だ。
それから、僕たちはなんでもない世間話をしながら帰った。

「……それにしても…」
帰り道、もう家に着くといった所で孝司はいつになく真剣な顔をして呟いた。
「ん？」
「いいかげんその《僕》っていうのはやめないか？」
「……」
……コイツ。
「いいじゃないか。これが《僕》の素だろ。」
「……違うだろ。」
「違わな――「違うさ。」――――い」
「……少なくとも１０年前はそんなんじゃなかった。」
「……孝司……」
「まだ…憎いのか？」
「……」
「それとも……まだ、自分を責めてんのか…？」
「……オレは、」

その問いに僕は答えようとして――

「「え？」」

――その瞬間、目の前が真っ暗になった。

第一章　第一話　《ｓｔｒａｎｇｅｒ　ｓｉｄｅ》　始まりは突然訪れた／終わ

初めて小説を書いてみました。（しかも連載）
まだまだ駄目なところがたくさんあると思いますので
どうか皆さんこの新米を温かく見守ってください。
感想・アドバイスなどくれるとうれしいです。

第一章　第一話　《astral side》　道はどこまでも続いている／

今回も文章力０ですが頑張りたいと思います。

第一章　第一話　《astral side》　道はどこまでも続いている／

私は歩いている。
――この張り詰めた緊張感が満ちた冷たい王城の廊下を。

私は歩いている。
――お父様が私の為に用意してくれた「第二王女」としての道を。

私は歩いている。
――いつかこの世界から争いを消して民を安心させるためにも。

私は、歩かなければならない。
――それが私、《アリア・アイネット・テリオル》の生きる道だから――

ピタリとアリアはドアの前で止まった。
目の前には大きな威圧感を放つドアがある。
（このドア一枚の向こう側に……お父様がいる。）
「……ふう。」
アリアは一旦深呼吸をして自らの気持ちを落ち着かせる。
（……よし！）
アリアは決心してドアをノックした。
「お父様。アリアです。」
「……入れ。」
ドアの向こうから低い声がした。

「……失礼します。」
そう言ってアリアはドアを開けた。

ドアを開けた先は一言で言うのならば書斎だった。
しかし書斎と言うにはあまりにもそこは広すぎた。
そしてそのほとんどの空間が書類で埋め尽くされていた。
本来なら入ることすら許されない空間。
その書斎の奥。窓際の椅子に国王――《ザリアス・リオストロ・テリオル》――は座っていた。
「中間報告に参りました。」
「うむ。」。
「…帝国軍は現在国境付近の《クリフの谷》にて前線基地を建てたようです。しばらくは向こうも攻めては来ないでしょう。」
「そうか……」
ザリアスはアリアのほうを見ずに窓の向こうを見ながら言った。
「《異邦人》の件はどうなっている？」
「微弱ながらも強い魔力の反応を2つ見つけました。3分前に準備が整いましたのでそろそろ祭壇に《召喚》される頃でしょう。」
「そうか……ッ！？」
いきなり顔を歪ませるとザリアスは忌々しそうに何かを呟いた。
それを見て心配したのかアリアはザリアスの傍による。
「どうかなさいましたか？」
「……してやられたよ。まさかこういった手段を用いるとは…」
「……まさか！」
「ああ。お前の想像通りだよ。まさか……」
ザリアスは窓の向こうにあるであろう谷と祭壇のほうを見ながら言った。

「――少数精鋭で無理矢理飛び越えて来るとはな。無茶な事を考える指揮官もいるものだ。」
アリアは絶句した。それは敵の進軍の仕方に対してではなく――
――それをここから感知したザリアスに対してだった。
（ここから谷まで一体どれほどの距離があると……）
が、今はそれどころではないと自分に言い聞かせてアリアはドアに向かって走り出した。
「アリア！」
「はい、直ちに祭壇へ向かいます！」
「気を付けろ。あの谷を越えて来るとなるとただの魔戦機（ませんき）ではあるまい。恐らくは…」
ザリアスの不安げな言葉に対してアリアは自信に満ちた顔で言った。
「おまかせを。たとえどのような敵が現れようとも――――――――
――このアリア・アイネット・テリオルが《蒼風》の名の下に。」
「……うむ。」
「では失礼します。」
アリアは書斎から出て一言呟くと風のように走りだした。
が、階段の真横を走り抜ける瞬間、彼女は一瞬考える。
（階段を降りる？そんな暇はない！）
そのままスピードを緩めずに廊下を一直線に走る。
（ここから外にでるための最短ルートは――――――）
その先は――――――解放されたテラス。
（ここから――――――飛べばいい！）
アリアはスピードそのままでテラスの手すりを足場にして――――飛んだ。

強烈な浮遊感を感じた時にはもう既に落下は始まっていた。
しかしアリアは恐れる事無く空を見ながら落ちていた。
ゆっくり彼女の右手が右に動く。
「――――来なさい！リコル！」
するといつの間にか隣を並走する形で落下している少年がその手を掴む。

その少年の髪の色は蒼く蒼くどこまでも蒼く――――

少年が何かを呟いた後、眩い光が煌めき――――――

――――――――――彼女たちは空から消えた。…

第一章　第一話　《astral side》　道はどこまでも続いている／

これで第一話の前編が終わりました。
ここからが大変ですが、気長に頑張ります。
さて、ご意見・ご感想・訂正などいただければ明日への原動力になります。
アドバイスとかでもいいのでお待ちしております。

第一章　第一話　おいでませ異世界／さようなら日常（前書き）

最近友達が皆インフルエンザにかかっています。
皆さんもご健康にお気を付けください。
なお、この物語にはインフルエンザに対する物は一切含まれておりません。

第一章　第一話　おいでませ異世界／さようなら日常

さて、とりあえず自己紹介をしよう。
僕の名前は月神俊輔（つきがみしゅんすけ）。何処にでもいるような物静かな高校二年生だ。
髪と眼は黒で１５８ｃｍと同年代からしたら明らかに小柄だ。
ルックスはまあ、そう自慢できるほどではなかったと思う。
多分卒業後に大多数の奴が「ああ、いたねそんな奴。」と三十人中二十九人がそう言うだろう。
…ちなみに例外は孝司である。
生活は僕と祖父の二人暮らし。まあ、祖父ちゃんは何時の間にか「修行に行ってくる」とか何とかで現在行方不明中。
まあ、殺しても死なないだろうからその内ひょっこりと帰ってくるだろう。
両親は……昔ビルの中でテロに遭った時、僕と妹の佑香（ゆか）を庇って死んだ。
佑香も逃げる時に爆発に巻き込まれて僕の目の前で死んだ。
……あの時の事は今でも忘れられない。間違いなく僕の今までの人生の中でトップ３に入るトラウマだろう。
何せ夢に出てきて一人生き残った僕にありったけの呪詛を浴びせる。
それから僕はとても塞ぎ込んでしまった。
一人生き残ってしまった事にショックを受けたからだ。
最終的に僕が立ち直れる切っ掛けになってくれたのは、

孝司と、

祖父ちゃんと、

テロの主犯格を捕まえた特殊部隊の隊長さんと――

――あとはもうこの世にはいない《彼女》だった。

孝司は塞ぎ込んで何も喉を通らなかった僕を本気で殴って、蹴って、叩きつけて、無理矢理食事を食べさせてくれた。
……今思うとやりすぎだと思うが、あの頃の僕はそうでもしないときっと後を追って自殺していたかも知れない。
それを考えると孝司にはいくら感謝しても足りないだろう。

祖父ちゃんは僕に荒治療と称して自分が教えている古流武術を教えてくれた。
僕の運動神経がない為に基本中の基本である型しか教えてくれなかったけれど、あれで自信もついたのも確かだった。

隊長さんは僕の相談に乗ってくれたりしてくれた。
あの頃の僕は今の比ではないくらいネガティブ思考に陥っていたから、
あの人がいなかったらマトモな人間にはなってなかっただろう。
――もちろんそれは今と比べて、だけど。

そして彼女は僕に――

――やめよう。本題からずれている。

そう、何でこんな事をしているのかというと

ほらあれだ、正しく現実を認識するには正しく自分を認識することが大事でえーと、

つまり簡単に言うと、

「Ｇｒｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ　――！」

「Ｇｙａａａａａａａａａａａａａａａａ――！」

「――、――――！」

「うわ！…おい見たか俊輔。あの鎧着た奴、手から炎出したぞ！すげー！」

「後ろ見て感心してないで、前見て走れバカ孝司！」

…現在僕は孝司に抱えられて狼？と鎧を着た兵士っぽい連中から全速力で絶賛逃亡中なのでした。

さて、何でこんな事になってしまったのか。

僕は孝司の体につかまったままここ数十分間の事を思い出してみる。
始まりは…そう。
間違いなくあれが始まりだろう。
そう、あれは２０分くらい前――――
――僕達がこの世界に落ちてきたことから始まった。

「「え？」」

――その瞬間、目の前が真っ暗になった。
それと同時に感じる強烈な重力。
それを認識した瞬間、僕は何もない所で落ちたのだと理解した。

――何もない所で？ありえない。
僕達はマンホールのそばで話していた訳ではない。
大体そんなヘマを僕がともかく孝司がするとは思えない。
「一体何――うぁ、」
疑問の声を上げた僕の頭に突如として痛みが襲う。
頭でもぶつけたかと思ったがまだ僕は落下中だ。ありえない。

「グ、ガァァァァァァァァッァァァァァァァ！」
今度は疑問を発することも無く痛みが襲う。
しかも一回だけではなく断続的に襲ってくる。
「い、痛い…頭が割れる…」
しかも痛みの間隔が短くなっている。
そう、この痛さを表わすならまるで
『知りもしない記憶を無理矢理押し込まれているような』感じ。
文化、歴史、事件、まるで旅行者が何処かへ行く時に事前にその場所を調べておくような…っ！
いきなり目の前の闇が、空間が歪んで――――

――不意に、世界が――――割れた。

次の瞬間、目の前に現れたのは高くそびえる石造りの壁……ではなく、床だった。
すぐに自分がどんな体勢でいるかを確認する。
床が壁に見えたということはそれはつまり正面に床があるということで、
「え、ってうわあああああ！」
――重力と共に僕はうつ伏せのまま落ちた。
足を床に向けようとして頭を向けてしまう。
それに気づいた時にはもう遅く――――
――――僕は頭から床に激突した。

「……ん、ううん……？」
「お、目が覚めたか。」
気がつくと孝司が僕のことを覗き込んでいた。
「……二、三十分くらい前に同じことがあったような…」
「そうか？」
僕は孝司に起こしてもらってその場に立ち上がる。
「…どれくらい気絶してた？」
「五分間くらいかな。頭から床に突き刺さっていた。」
「……よく生きているな、僕。」
そう言ってまだズキズキ痛む頭に触れてみる。
…うん、怪我はないみたいだ。
「…で、ここは何処なワケさ？」
僕は頭を押さえながら周りを見回してみる。
床は落ちる前に見た石造りの床で、周りには太い石の柱があってとにかく広かった。
まるでＲＰＧの神殿みたいな所だと思った。
うん、だって周りにもなんか黒いローブ着た人とか白いローブ着た人とかいるし――――
――――ローブ？
「はい…？」
よく見るとなんか魔導師っぽい人たちがいる。
フード被っててよく顔は見えないけれど揃いも揃って共通していることは――

――なんか全員、困っているような感じだった。
「えーと…？」
「いいか俊輔。…落ち着いてよく聞いてくれ。」
何だ？こいつら？といった感じの僕に孝司が何かを伝えようとする。
「ここは何処なのかというお前の質問に対しての答えなんだが…」
いやいや、それどころじゃないだろう。
「ねえ、孝司。この人たちは一体「――異世界なんだ。」……は？」
……
……イマ、コノヤロウハナンテイッタ？
「だからな……」
やれやれ、といった感じで孝司はもう一度僕に言った。

「ここは――――――《異世界》なんだ。」

……はい？
「……はい？」

この瞬間、月神俊輔を歪みながらも支えた《日常》という名の柱は、音もなく消え去った――――。

第一話　おいでませ異世界／さようなら日常　ｅｎｄ

⇒ｎｅｘｔ　ｓｔｏｒｙ　言葉の通じない未踏の地で／翻訳者・陽山孝司でお送りします。

第一章　第一話　おいでませ異世界／さようなら日常（後書き）

さて、今回の話で主人公である俊輔君の人物像が皆さんに伝わったらいいなと思っています。
さて、毎度おなじみ（まだ3回目）お便りコーナー？
皆さんのご意見・ご感想をお待ちしております。
アドバイスや、訂正のご指摘、ダメ出しでもかまいませんので
お待ちしております。

あ、ここまでで一話ですよ？

第一章　第二話　言葉の通じない未踏の地で／翻訳者・陽山孝司でお送りします

信用と信頼はまるで違う――

第一章　第二話　言葉の通じない未踏の地で／翻訳者・陽山孝司でお送りします

今、石造りの神殿っぽい所（めんどくさいので神殿）にはなんとも言えない空気になっていた。
原因はご存じ陽山孝司――ではなく、この僕の方だった。
理由は簡単。実に簡単でしかしこんな場所においては致命的な問題があったからだ。

「……いくぞ。準備はいいか？俊輔。」
孝司のその問いに僕は一言、ああ。と頷き次の一言を待った。
さっきまでの空気がまるで嘘のように張り詰めていく。
「じゃあ、始めてください…」
孝司が隣にいる黒ローブに話しかける。
ゴクッ、っと息をのむ音が聞こえた。周りの魔術師の方々だろう。
皆が今か今か黒ローブの次の言葉を待つ。
僕も過去今までにないくらいの集中をして――――

「……ａｉｒｉｌｔｅａｕｒｙｕａｔｅｍｕ？」
「ごめんなさい。まったく分かりません。」
あぁ～、みたいな感じで魔術師の皆さんは思いっきり落ち込んだ。
孝司もなんか溜息ついてるし。
…え？何、これ？この空気はもしかして僕が悪いの？
いやいや、だってしょうがないじゃないか。分かんないんだから。
僕のせいではない。……多分。
大体何で分かるの孝司。

現実逃避……しようかな。

◆

さて、何がどうなっているのか分からなくなってきた。
こういう時、俊輔ならきっと自分の事を振り返るのだろう。
きっと自分を過小評価しながら。
では、俺も敬愛すべき我が《悪友》にならって自分の事を振り返ろう。
まずは名前から。
俺の名前は陽山（ひやま）　孝司（こうじ）。
高校二年生でそこの月神俊輔とはお向いさんだ。
身長１９８ｃｍで髪型は茶色に染めたツンツン頭。眼は普通の黒。
日本人だからね。
自己的に判断してそんなにもてる外見ではないとは思うんだけどなぜかよく告白される。
前に「なんでこんなにもてるんだろう？」って言ったら俊輔に殴られた。
あと、「君は全校生徒の過半数を今敵に回した。」とかなんとか。
自分だって一部の女子に好かれているのに何を言ってるんだか。
きっと、気づいてないんだろう。今度遠まわしに教えてあげよう。
一応、学年トップクラスの成績をキープしてる。
あと、１００ｍを１０秒前半台で走れる。
とまあ、こんなところかな。
あ、俊輔が現実逃避を始めている。

「あの……コウジさん……」
後ろから綺麗な声がしたので振り返ってみるとそこには純白のロー

ブを着た女の子がいた。
背は大体俊輔と同じ――いや、あいつより若干高いからきっと１７０前後だろう。
綺麗な赤い髪をしていて恐らく１６、７歳くらいだろうか。
「なんだ？えーっと…」
「ファルナです。ファルナ・エートランド。」
「ああ、ファルナ。よろしく。」
俺は手を差し出した。人間間における信頼関係の始まりは握手からだと思うんだ。うん。
よろしくお願いします。とファルナは俺の握手に応じてくれた。
「あのそれで、その……」
「何だ？遠慮なく言っていいぞ？」
「はい。その…」
ファルナはちょっとだけ躊躇すると少し小さな声で言った。
「…シュンスケさんの事、なんですけど…」
ああ、なんだその事か。
「気にしなくてもいいよ。君が悪いんじゃない。」
そう。別に彼女は――彼女たちは悪くないのだ。
そう思いながら三分前の事を思い返す。
三分前、そこのソイツが俺のことを変な物を見るような眼で見た時のことを――

△

「……はい？」
そんな間抜けな声を上げたのは我が《悪友》月神俊輔だった。
「……ごめん。もう一回言って。」
「ここは異世界なんだ。」
「もう一回。」

「ここは異世界なんだ。」
「……ワンモア、プリーズ？」
「…ここは、異世界なんだ。」
ようやく聞きなおしが終わった。
「もしかして頭を打った際に耳がおかしくなったんじゃ…」
「おもいっきり聞こえてるよ。」
そう言って俊輔はグルリと周りを見回した。
周りにはさっき俺に状況を教えてくれた《魔術師》達がいる。
俊輔は一通り周りを見た後、俺の方を向いて一言。
「孝司。もしかして頭でも強く打った？」
「それはお前だ！」
「いやだって、なぁ。」
「…なんだよ。」
俊輔は怪しむようにもう一度魔術師達を見回して、
「それこの人たちに聞いたんだよね？」
「あぁ。そうだが？」
それがどうかしたのか？
「ここは異世界です。…なんて言われて、はいそうですか。なんて納得出来るわけないじゃないか。」
何だ、そんな事か。
「それは単純にお前が疑り深いだけだ。それに…」
「それに？」
「こう、何かあるだろ？知ってるはずの無いことを知ってるとか。」
そう、俺だってそう簡単には信じないさ。
信じたのには理由がある。
その内の一つが《記憶》だ。
知識としてだが、今この世界がどんな状況なのかは知っている。
「う…ん…むむう。」
どうやら俊輔にも思い当たる節があるらしい。
「でもそれだけじゃ弱いよ。他に根拠はあるの？」

「もちろん。むしろこっちの方が決め手だ。」
俺は皆を見回して俊輔に言った。
「この人達、お前をずっと看病してくれてたんだ。」
どうだ、これならこいつも信じて――

「……ふうん。ま、いいか。」

「え、それだけ？」
「うん。それだけ。」
「どうしてだ！充分な理由じゃないか。」
「まあ、待ってくれよ孝司。別に君の事を疑ってる訳じゃない。」
じゃあ、どういう意味なんだ。
「僕はまだその人たちと会話を一言も交わしていないんだ。」
ああ、そういう事なのか。
「つまり、実際に話して判断するって？」
「そういう事。君が握手から人間関係を構築するように僕は会話から入る人間なんだ。」
「そしてぶち壊すと。」
「…君が僕をこの１２年間どういう目で見てきたか良く分かったよ。」
「あの……」
「「ん？」」
声がした方に振り返ると白いローブがそこにいた。
「私はファルナ・エートランドといいます。申し訳ありませんが、少しお時間をいただけないでしょうか？」
ナイスタイミング。まずはこれで和解への一歩が踏み出された！
「ほら、向こうからお話がしたいってよ。」
「……？」

「？じゃないだろ。お前が、話したいって言ったんだろうが。」
「う、うん。確かにそうは言ったけど…」
なんか歯切れが悪いな。
「じゃあ、良いじゃないか。えーっと、ファルナだっけ。こいつも話がしたいってよ。」
俺は白ローブの女の子にそう告げた。
「そうですか。それは良かった。」
ファルナは俺のことをちらりと見て俊輔に言う。
「先ほど孝司さまにも簡単に説明したのですが実は「……ストップ。」はい？なんでしょうか？」
何だ？さっきから俊輔の様子がおかしい。
俊輔は俺にこう訊いてきた。
「孝司にはこの子が何て言ってるのか分かるんだよね？」
「当たり前だ。じゃなきゃ話にならないだろ？」
「…そっちの彼女は僕の言ってること、分かる？」
「もちろんです。ちゃんとそちらの世界での言語を全て《セントラルキューブ》が翻訳してくれてますから。」
お、何か新しい単語が出てきた。後で、聞いてみよう。
それにしても俊輔の奴は一体何が言いたいんだ？
「おい、俊輔。お前一体何が言いたい「…分からないんだ。」……んだ？」
俊輔は何とも言えない顔で申し訳なさそうにここにいる全員言った。

「だから……彼女たちの言ってる言葉が分からないんだ。」

「……は？」
……分かんない？
「「「「「な、なにぃぃぃぃぃぃ！？」」」」」
びっくりしたのは今まで無口を通していた魔術師の皆さんも同じだった。

△

「まぁ、あいつも気の毒に…」
「本当にすいません。私たちのせいで…」
ファルナは目に涙を溜めながら俺に謝ってきた。
「いいって。あいつもそんなに怒ってないからさ。」
俺は出来るだけ優しく言った。
別に俺は怒ってないし。
「ほ、本当にですか？それにしてはシュンスケさんが怖い顔でこちらをじっと見ているのですが…」
え、と俊輔の方を見ると何か凄い目でこっちを見ていた。
……今日のあいつなら阿修羅くらい凌駕しそうだ。

◆

あ、気づかれた。
まあ、いいや。このまま睨んでおこう。
僕はそうやって睨んでおきながら別のこと――僕がこの世界の言語

を理解できない理由についてファルナさんが言っていた事（訳・孝司）を思い返していた。

――この世界には《絶対破壊不可能》と呼ばれている古代遺産（アーティファクト）・《セントラルキューブ》というのがあるらしい。
あらゆる知識を内包しておりそれを引き出すことの出来るものらしい。
でも現在はその知識を引き出すことができないのだとか。
ハッキリ言ってそれじゃ意味がないじゃないか。と思ったが実はまだ使い道があるらしい。
その内の一つが《異世界の言語を翻訳する》ことらしい。
なんでそんな機能が？と思ったがそれは解明されていないのだとか。
ちなみにこっちに来る時にソレに何か登録されるとか。

原理は簡単に言うとこうだ。

僕達が喋る。（伝わる）
←→
セントラルキューブがそれを翻訳する。
←→
この世界の人たちに喋る。（伝わる）

…なんて分かりやすいのだろう。
こんな風に教えてくれたファルナさんもそうだが、うまく伝えた孝司もすごいと思う。

…話を戻そう。
なんで孝司がこの世界の言語が分かるのかこれでハッキリした。
もしかして実は異世界の言語だって解るのかと思ったが、なんてことはない。

ただ得体の知れないものに翻訳してもらってるだけじゃないか。
また、《主人公補正》っぽいものに助けられてるんじゃないかと。
まあ、それはおいといて。
次が、本題。
――なんで僕には分からないのか。
これはよく分からないらしい。
一応、僕達を召喚した儀式のシステムについて教えてもらった。

異世界から《魔力保有量》なるものが高い人間を選んでこちらに召喚するらしい。
その際に先ほどのセントラルキューブに登録するらしい。
そして登録されたら召喚場所の空に転移するらしい。
らしい、らしいっていうのはもちろんそうらしいという事しか知らないからだ。
今回僕達は同時に召喚されたが、ここに転移したのは孝司が先だったらしい。
孝司が言うには、
『何か真っ暗な所に落ちた後、すっごく頭が痛くなってその後闇が晴れていってそしたら空中にいた。』とか。
うん、晴れていってないね。割れていったね。
ちなみに綺麗に着地したらしい。ちょっとムカツク。
まあ、僕の推測通りならきっとそれが原因だろう。
…ちなみに今、僕はここが異世界であると仮定している。
もともと話し合って判断するつもりはなかった。
あの孝司が信じているのだ。
……あいつはバカだけど人を見抜く力を持っている。
僕が孝司を《信用》している理由はそこにある。
…そう。《信用》だ。決して《信頼》ではない。
僕が彼女達と話をしたかったのは、孝司が《信頼》した人たちがどんな人たちかを見極めるためだ。

…ただ、僕にも《信頼》出来る人たちかどうかを。
そんな事を考えていたら――

――頭を小突かれた。

◆

「痛。」
「いつまでお前は人のことを睨みつけてるんだ。」
睨んでいながら眼はどこか虚ろになっていた俊輔の頭を軽く小突いてやった。
きっとこいつの悪い癖――意識を別のことに向ける――だろう。
周りからみたら怖い顔してるんだからやめろ。って言ってるんだけどな。
だってそのせいで、
「ご、ごめんなさい！きっと私たちのせいです、ごめんなさいごめんなさい！」
「見ろ！お前が睨み続けているからファルナがずっと謝ってるじゃないか！」
凄まじいほどの土下座っぷりだった。しっかり頭つけてるし。
「う、うわ！ご、ごめんファルナさん。怖かったよね。怒ってないからもうやめて！」
「え、ほ、本当ですか！怒ってないですか？」
「え、ごめん。何言ってるか全然分かんない。」
…俺は、静かに感動していた。
――悪友よ。お前、彼女と一緒ならお笑いの頂点を目指せるんじゃ

ないか…？
「…う、うううううう…」
気づけば俺は泣いていた。
「うん。とにかく分かんないけど僕は怒ってないから。……あれ、孝司何泣いてんの？」
「何でもない……何でもないんだ……」
「「？」」
「…ファルナ様。お取り込みの最中、申し訳ありません。そろそろ城へお二人を連れて行きませんと。」
感動的な空気をぶち壊したのは黒ローブを着た7、８０歳くらいの爺さんだった。
「あ、はい。そうですね。そろそろ行きませんと。」
ファルナはこっちを見て言う。
「これから我が国の首都へとお二人をお連れしたいと思います。」
「なんだって？」
「これから首都へ移動するってさ。」
「それってどのくらい？」
「歩きで2、３０分くらいかかります。馬車で行きますので１５分くらいかと。」
「１５分だってさ。」
分かった。と俊輔は頷く。
そこへまた新しい黒ローブがやってきた。
「ファルナ様。予備の《メモリーオーブ》を見つけました。多分この神殿最後の物です。」
「本当ですか！良かった…」
黒ローブが持ってきたのは手のひらサイズの水晶玉だった。
「ファルナ。そのメモリーオーブってのは？」
「セントラルキューブの端末です。これがあればセントラルキューブに登録できます。」
「本当か？おい、俊輔。お前にも分かるようになる「本当に！？」

ああ。これを使えばな。」
俺はメモリーオーブを指差した。
「で、向こうに行ってから使うのか？」
「いえ。まだここには儀式に使った《マナ》があるのでこちらで行います。」
マナ？魔力みたいなもんか？
ファルナは黒ローブからオーブを受け取ると俊輔の前に立った。
「なにするの？」
「儀式です。大丈夫。すぐに済みますよ。」
「儀式だってさ。」
ファルナは深呼吸をしてから真面目な声で言った。
「…では、始めます。力を抜いて下さい。」
「力抜けって。」
「分かった。」
すう。と俊輔の体が浮かび、次にファルナの手からオーブが浮かぶ。
「おお…」
俊輔が驚いたように声を上げる。
「すげぇ…」
俺も釣られて声を上げる。
『世界に満ちしマナよ…我が願いを聞き入れたまえ…』
それはさっきまでの明るくてちょっと天然だった声とは違い、とても威厳に満ち溢れていてとっても優しい声だった。
『世界に満ちしマナよ…大いなる箱よりこの者にこの世界と語らう力を授けよ…』
すると、宙に浮かんでいたオーブが俊輔の体の周りを不規則に回っていく。
そしてオーブから見たことのない文字が現われて俊輔の体の覆っていく。
「綺麗だ…」
「ファルナ様はあの若さで我ら宮廷魔術師の頂点におられるお方。

これくらいで驚いていたら後で腰を抜かしますぞ。」
「そ、そうなのか…」
呆然と俺はその光景を見ていた。
――儀式は終わりを迎えようとしていた。

◆

すごい、と僕は思った。
――体が、浮いている！
それはこっちに飛ばされた時のような落ちていく感覚ではなくそっと誰かに体を持ち上げてもらってるような感覚。
人形のように糸で釣られているような感覚ではない。
僕は、ようやくここが異世界なんだと認識した。
『世界に満ちしマナよ…我が願いを聞き入れたまえ…』
声が、聞こえる。
この声はきっとファルナさんだろう。
なるほど。と思う。
（――とても綺麗で優しい声だ…）
孝司の言うとおりできっとこの人は優しい人なんだろう。
そこでふと思った。
今、どうしてファルナさんの言葉が分かるんだろう？
まあ、そんな事はどうでもいい。
後で移動中に聞こう…
『世界に満ちしマナよ…大いなる箱よりこの者にこの世界と語らう力を授けよ…』
二度目の詠唱が神殿に響き渡る。
僕の目の前に浮いていた水晶玉――メモリーオーブが僕の周りを不

規則に、包み込むように動く。
そしてオーブから尾を引くように文字が出てくる。
現実ではありえない、幻想的な感覚。
しかし僕は、これが夢や幻でないことを知っている。
間違いなくこれは、現実なのだ――
『世界に満ちしマナよ…今ここに我が名、ファルナ・エートランドの名において命じる。』
三度目の、詠唱をファルナさんが唱える。
――僕にも儀式の終わりを感じる。
『…この者に、大いなる箱の恩恵を――――』
まずはちゃんと始めましてから始めよう。
そう決意した僕を――――――

『あたえ――きゃあ！』

――――重力はそんな僕を無慈悲に叩きつけた。

爆発音と――――――何かが勢いよく割れた音と共に。

僕の、希望と共に――――――

第二話　言葉の通じない未踏の地で／翻訳者・陽山孝司でお送りします。　ｅｎｄ

⇒ｎｅｘｔ　ｓｔｏｒｙ　謎の声に導かれて――／僕と孝司と甲冑と、時々、狼？

第一章　第二話　言葉の通じない未踏の地で／翻訳者・陽山孝司でお送りします

はい。今回は孝司君の視点を交えながら俊輔君の危機について語りましたがいかがだったでしょうか？
さて、今回も皆さんのご意見・ご感想をお待ちしております。
アドバイスや、訂正のご指摘、ダメ出しでもかまいませんので
お待ちしております。
それでは。

第一章　第三話　謎の声に導かれて――／僕と孝司と甲冑と、時々、狼？（前書

一人称を変える人間は多分五種類に分かれるだろう。
1、二重人格者だから
2、趣味でやっている
3、厨二病でカッコ良さそうだから
4、なんとなくで使い分けているから
5、過去の体験により本当の自分を見せる事に恐怖を感じ、都合のいい仮面を被る事で自分を隠した――――臆病者だ。

第一章　第三話　謎の声に導かれて――／僕と孝司と甲冑と、時々、狼？

「うわっ！」
急に浮遊感が無くなり僕はまた、落ちた。
――――今度はしっかり着地したけれど。
「なんだ！何が起こった！？」
孝司の声が聞こえる。
「何があったのさ！孝司！」
「わかんねぇよ！」
周りを見回す。
さっきの爆発でどこか崩れたのか辺りには煙が漂っている。
すると、うずくまっているファルナさんを見つけた。
走って駆け寄る。
「ファルナさん！どうしたんですか！どこか怪我…で…も……」
近づいた僕の目に映ったのは――――
――――緩慢な動作でこちらを覗きこんで砲門らしきものを僕達に向けたロボットと――――
――呆然とするファルナさんと――――
――――粉々に砕けたメモリーオーブだった――――
あ、やべ……

◆

「俊輔！ファルナ！」
気がつけば俺は全速力で走っていた。
距離は４０ｍくらい。
――間に合え！
するといきなり体が軽くなったような気がした。
「コウジ様！肉体強化の魔術をかけました！ファルナ様とシュンスケ様を！」
「何か分かんないけどサンキュー！」
先ほどよりも早くなった。
これならきっと間に合う！
「俊輔！ファルナ！俺に掴まれ！」
「うわっ！」「は、はい！」
二人の腰の辺りを抱き込むようにして走る。
「コウジ様！こちらへ！」
そちらを見ると黒ローブの男がドアの前で俺達のことを呼んでいた。
「分かった！今そっちに…」
「孝司！右に飛べ！」
急に後ろを見ていた俊輔がいきなり叫ぶ。
それに応じて右に飛んだ。
ドッオォォォン！と轟音が鳴り響き、
さっきまでいた所が抉れて吹っ飛んでた。
「あぶね…」
「バカ！止まんな！全速力で走れ！」
俊輔の言葉に頷き全速力で走った。
横目でチラリとさっきのロボットを見る。
四足歩行で何かポ〇モンのメタグ〇スぽかった。
そのままドアの向こうに飛び込む。
『大地の如き堅牢さを授けよ！』
黒ローブが呪文っぽいものを扉にかけた。

「これでしばらくはドアが耐えてくれます。ファルナ様。今の内に王都まで脱出を！」
「なりません！私に部下を見捨てろと言うのですか！」
「優先順位をお考えください！あなたは王からの勅命を受けているでしょう！」
何かファルナは黒ローブと喧嘩している。
「なあ、俊輔？俺達どうしたら…俊輔！？」
「……駄目だ……」
「ど、どうした？」
「…儀式が終わってなかったから後ろでどうして言い争ってるのか分かんねぇ…」
「まじかよ…ん？俊輔お前口調が…」
「…え？口調がどうしたって…？」
「…何でもない。」
気のせいだったか…？
「…で、何で喧嘩してるの？ファルナさん達。」
「うん。実はかくかくしかじか…」
「それで分かったら凄いよ…しかし優先順位ねぇ。」
「分かってんじゃねぇか。」
「…よし。だったら…孝司。通訳お願い。」
「あいよ。」
「ねえ、ファルナさん。」
「私「あの…」何ですか！少し待っててください！」
「いや、悪いけどそんな時間は俺達にはないと思う…。」
「実はファルナさんに聞きたい事があるんです。」
「聞きたい事？何ですか？」
「何だってさ。」
「この神殿に隠し通路の類はありますか？」
ファルナは少し悩んでからこう言った。
「…そこのドアを開けて角を左に曲がった後に十字路があります。

そこを右に三歩進んだところに一か所だけ色の違う壁があります。
そこを四回叩けば隠しの通路が出てきますが…？」
俺は俊輔に隠し通路の存在を伝えた。
「…僕と孝司はそこから一旦脱出します。」
「「「はぁ！？」」」
俺もビックリ。何言ってるんだ俊輔？
「今の僕達がいても邪魔なだけでしょう。それなら二手に分かれて後で合流した方が安全です。」
「…俺達だけでさっきのロボットに遭ったらどうすんだよ？」
「逃げる。」
「ロボット…？ああ、魔戦機のことですね。」
魔戦機って何だ？
「でも、そんな危険なことはさせられません。」
あれ、またごちゃごちゃしてきたな。
俺は俊輔にファルナの意見を伝えた。
そしたら俊輔はニヤリと笑う。
「ファルナさん。僕達の荷物はここにありますか？」
「鞄でしたらそこに置いておきましたが…」
鞄の中…？あ、そうか！
俺達は下校途中に召喚された。下校途中という事は当然鞄もこっちに来ているはずだ。
俺達は色々と事件に巻き込まれる事が多かった。
そこで、何か遭った時に使えそうなものを常に持っておこうと決めたのだ。
「ファルナ。実は俺達は向こうの世界でもある程度、厄介事に関わったことがあるんだ。逃げるのには自信がある。」
「相手はあれだけではありませんよ？向こう側の騎士や、兵士だっています。」
「騎士？人がいるのか？だったら問題は無いよな。俊輔？」
「ああ。人が相手ならやりやすいね。」

「は、はぁ…」
「よし、善は急げだ。ファルナ、鞄は何処にある？」
「こちらです。コウジ様。」

いきなり、真横から声が聞こえた。
振り返ると、そこには――

「初めまして。ワタクシ、ファルナ様の従者のようなものをしております…カレンと申します。今後とも宜しくお願いします。」

――とんでもない美女がいた。

◆

「初めまして。ワタクシ、ファルナ様の従者のようなものをしております…カレンと申します。今後とも宜しくお願いします。」

カレンとそう名乗ったその女性はとっても美人だった。
髪はファルナさんのように――いや、それよりももっと朱くて長さは腰までスラっとのびている。
眼はエメラルドのようなとても綺麗な翡翠色。スタイルは文句の付けどころのない。
そして何より包容力のある優しい雰囲気が出ている。
そこまで思ってふと気がついた。

――言葉が分かる…？

「御心配にならなくてもワタクシは貴方方の言語で話しかけているだけです。」
覚えるのは苦労しました。とその女性――カレンさんは鞄をいつの間にか僕に差し出しながら言う。
「は、はぁ…そうですか…」
僕はカレンさんから僕と孝司の二人分の鞄を受け取りながら返事を返す。
「この神殿の近くにある谷から彼らはやってきています。そちらには近づかないように。」
聞きたい事を先に言われた！
「じゃあ、僕達は一旦神殿を出ます。今の時間は「現在午後４時５０分となります…こちら側でも時間表記はほとんど一緒ですよ。後、山谷風にご注意ください。谷より逆に向かえば安全でしょう。」…
…ありがとうございます。」
ほとんど聞きたい事を言われてしまった。
もうどうでも良くなってきた。
「い、行こうか…孝司。」
「お…おう。」
僕らはいきなり現れたカレンさんに感謝をしてそれからファルナさん達に頭を下げて先ほど飛び込んだのとは別のドアから神殿の廊下に出た。

「右に三歩…これかな？」
見ると天井付近の一か所だけ色が違う。
僕はそこを押そうとして背伸びした。
「あれ？届かないな…」
「俺が押すよ。」
孝司が背の低い僕の代わりに壁を四回叩いた。
すると床の一部がスライドして地下に続く階段が出てきた。

よし、鞄の中には何が入っていただろう…？
「げ…これだけしか無いのか…」
僕と孝司の鞄から出てきたのはテキスト、ノート、筆記用具…こんなものはどうでもいい…事無いか？
そして、僕愛用の金属入りハーフフィンガーグローブと、孝司愛用の特殊警棒、あとうちの高校の発明同好会からもらった振ると充電できる懐中電灯。
「…おい、俊輔…」
「……もっと何か入ってると思ったんだ…許してくれ…」
「…まあ、今から戻るのも何かあれだしな…」
まあ、これから地下に降りるんだし懐中電灯でも役に立つだろう。
僕達は階段を下りた。

◆

「カレン！何処に行っていたのですか！」
「《クリフの谷》から《エーテル》が異常に溢れていたので調査を。勝手な真似をして申し訳ありません。」
カレンは私に頭を下げて謝った。
「…結果は？」
「谷の向こうに《帝国》の前線基地を。襲撃部隊は魔戦機五体、帝国軍兵士三十二人。それと、谷を凍らせた《魔鋼機》が一体。薄いスカイブルーの機体でした。内、兵士三十人はここに戻るまでに排除しました。」
「氷を操る薄いスカイブルーの魔鋼機…確か、《冥氷》とか言う…」
「その可能性が高いかと。」
「…三十人と言いましたね…残り二人は？」
「領内に侵入させてしまいました。申し訳ありません。」
「もう謝らなくても構いません。それより、魔戦機五体は？」

「ただ今、神殿・祭壇内に一機。残り四機は神殿の四方を囲むように配置されています。」
「そうですか……セバスチャン！チャーリー！」
「はい。ファルナ様。」
「お呼びですかな？」
私の前に二人の魔術師がやって来る。
「貴方達は他の皆を神殿から逃がしてください。私はカレンと周辺の魔戦機を倒してからあの二人と合流します。」
「「分かりました。」」
そう言って二人は先程コウジさんとシュンスケさんが出て行った扉から神殿内に散らばる。
「…あの二人は無事、逃げ切れるでしょうか…？」
「コウジ様御一人ならそれも可能でしょうが…問題はシュンスケ様のほうかと。」
「…そんなに酷かったですか？彼は。」
「ハッキリ言って劣悪です。ワタシが鞄を差し出したのに気づくまで五秒間かかっていました。コウジ様はすぐに気が付きましたが。」
「…致命的な反応の遅さですね。……そういえば召喚した際も着地に失敗していたような…」
「一応、重心はしっかりしていたので何らかの武術をやっていそうですが…果たしてそれで逃げ切れるのか…ましてや《冥氷》が来ているとなると…」
これはあの二人を先に逃がしたのは失敗だったかもしれない。
急がないと二人とも危険だ。
「…急いであの二人と合流しましょう。でもその前に…カレン。」
「はい。アレを排除しましょう。」
私とカレンは祭壇内に戻る。
祭壇には先程の魔戦機がいた。
「あれは一体何という名前だったでしょうか…」
「《スタンディス》…魔戦機と呼ぶのもおこがましいただの移動砲

台です…その分コストは安上がりですが。」
スタンディスのアイカメラがこちらを覗きこむ。
それと同時に砲身も動き出す。
「…安上がり？《エーテルカノン》を装備してですか？」
「帝国は兵器製造技術に優れていますから。それにあれは恐らく精度の低い粗悪品でしょう…それでも生身で喰らえば消し飛ぶでしょうが。」
私達に、照準が定まる。
「まあ、いいでしょう。それより私達は急いでるのですから早く終わらせましょう。」
「分かりました。」
砲身の向こうに緑の光が収束していき――

『――――燃（バーン）えさかれ…《ソードイフリート》！』

周囲は――業火に包まれた――

◆

「何て言うか…さ」
「ああ、全く無駄だったな。」
階段を下りてすぐに何か光ってる魔方陣っぽいのがあったので触れてみると何か薄暗い所に出たので手探りで見つけた扉を開けると――

――森だった。どっからどう見ても森だった。
「…誰か教えてくれれば良かったのに…」
（じゃあ、今度からは教えてあげるよ。）

「――――ッ！？」
何だ？今の声は？
「孝司。何か言った？」
「あ？何も言ってねえけど？」
（彼は何も言っていないよ。君に話しかけているのはボク。…それよりいいのかい？君達、逃げているんだろう？）
そうだった。
この声のことは分からないが今はここから離れるのが先だ。
「孝司。先に行こう。」
「ああ。どっちに行くんだ？」
僕は風向きを確かめる。
…まだ陽は昇っているから風の吹く方向に進めば谷から離れるはずだ。
「…多分こっち。」
（あ、言い忘れていたけれどそっちには…）
この時、僕はもっとこの謎の声をしっかり聞いておくべきだったと後悔した。
僕らが進んだその先には――

「……」
「……」
「……」
「……」

――鎧着た兵士が二人、真正面にいた。

「…に、」
「「逃げろー！」」

△
…はい、回想終了。
何か僕の回想以外もあった気がするけどそんなことはなかった。
その後逃げてたら狼っぽいのとかもやってきて喰われそうになったりして。
…僕達はあれから森の中を全力で走っていた。
何とか振り切れたが一応走って距離を稼いでおいたのだ。

「孝司！次の木を右に！」
「分かった！」
孝司が僕の言うとおりに右に曲がる。
「ストップ！」
僕は孝司を止める。
「…一旦休憩しよう。」
「ハァ…ハァ…っ！…ハァ。わ、分かった…」
孝司は僕を降ろすとその場に座り込んだ。
神殿内にいた時は気付かなかったがもう日が沈み始めている。
夜になるのも時間の問題だろう。
「まったく、どうなってるんだか…」
「ファルナ達大丈夫かな…」
「…あのまま、僕達が居たままだったら絶対に足手纏いだったよ…」
「そりゃ分かってるけどよ…クソッ！」
ガンッ！と孝司は木を殴りつけてそのままもたれかかった。
「なあ、俊輔…」
「…なんだい？」
「あれ…なんだったんだろう…」
「……」
僕は答えない。
「俺はここを異世界だ。って聞いたんだぜ。」
僕は答えない。

「普通、異世界って言われたらファンタジーな世界だろ…」
僕は、答えない。
「何でロボットとか出て来るんだ…？」
僕は――答えられない。
答えられるはずがない。

「……分かんないよ…」
〈じゃあ、教えてあげようか？〉
「――っ！」
「…どうした。何か見つけたのか？」
「……いや、疲れているだけみたいだ。」
「…休んどけよ。俺が見張っておいてやるから。」
「でも…」
「いいから休め。こんな時にお前が倒れたら困るんだ。」
「……分かった。」
〈そうそう。それが賢明な判断だよ。〉
「…お休み、孝司。何かあったらすぐ起こしてね。」
「分かった。任せとけ。」
――孝司のその言葉を最後に僕は意識を闇の中に落とした。
……
……
…
◇

そして――――

「やあ、こうして話すのは初めてかな？月神俊輔君。とは言っても、ボクの体はこんな光の寄せ集めのような物じゃないけどね。」

僕は――オレは夢の中でソイツと出会った。

「お前か。さっきから僕の頭に話しかけていたのは？」

「そうだよ。でもお前なんて呼び方はしてほしくないなぁ。もうちょっとフレンドリーに呼んで欲しいなボクは。」

そいつの体は――――体と呼べるのか？――――まるでそこにだけ光が集まったようなそんな体だった。

そう、光そのものに話しかけられているような、およそ理解の範疇を超えているような光景。

「…あ！そうだ。いい名前を思いついたよ。ボクのことは《ｎａｇｉ》って呼んでくれないかな？」

――――その光の集合体はまるで新しい玩具を見つけた子供のようにオレに言った。

第三話　謎の声に導かれて――／僕と孝司と甲冑と、時々、狼？

ｅｎｄ

⇒ｎｅｘｔ　ｓｔｏｒｙ　仮面被りと光の助言者／Ｌｅｔ'ｓ　ｑｕｅｓｔｉｏｎ！

第一章　第三話　謎の声に導かれて――／僕と孝司と甲冑と、時々、狼？（後書

この物語はファンタジーロボットアクションです。
……あれ？これって嘘なんじゃない？
一体いつになったらウチの主人公は戦うのでしょうか？
自分でそう思うようになってしまった第５話です。
皆さんお元気でしょうか？
最近キーボードがおかしくなってきました。
さて、５話では俊輔君の頭に響く謎の声を頼りに脱出を……頼りにしてない！？
それとファルナには雑魚とのバトルフラグを立てました。
一章が終わる前に戦闘シーンは出来るのか？分かりません。
こんなに回想に時間をかける事に腕の未熟さを感じます。
いつも通りに感想お待ちしております。

答えのある問題は解く気になれるが、
答えのない問題は解く気にもならない。
だったらこの時の会話は一体どっちだったんだろう？

何処までも暗い、昏い、闇（ユメ）の中。
……オレはソレと対峙していた。

「…お前は一体何だ？」
「ｎａｇｉって呼んでって言ったじゃないか。…その質問をそっくりそのまま返すよ。君は一体何なんだい？」
――光の集合体はオレの質問に対して質問で返す。
「僕は…月神俊輔だ。…お前だってさっき名前で呼んだじゃないか。」
「違う違う。名前なんてとっくの昔に知っているよ。…それに一体いつまで仮面を被っているつもりだい？自分の心の中でさえ君は自分の本心を曝け出さないつもりかい？」
「…仮面は人の前で使って初めて効果を発揮するものだ。お前がいなくなったら僕は仮面を外すよ。」
ふうん、と光の集合体――ｎａｇｉは面白くなさそうに拗ねた。
――何だろう。こいつと話していると何か違和感を感じる。
「…まあ、いいや。今日は禅問答をするために君にこんな苦労をして会いに来たわけではないからね。」
さてと、とｎａｇｉは気を取り直したようにオレに言った。
「聞きたい事、あるんだろう？遠慮せず聞いていいよ。」
「…僕がお前から情報を聞くことによるお前のメリットは？」
「ないよ。ただ君が得をするだけさ。」
「……信用できないな。」
オレがそう言うとｎａｇｉは可笑しそうに笑った。
「…《信用》できないんじゃなくて《信用も》の間違いだろう？《人間不信》の《仮面被り》。」
その言葉に血が上る。

オレはなるべく平静を装って言葉を「なんだ、今ので怒ったのかい？ジョークだよジョーク。」…返せなかった。
「ん？何で分かるんだ。みたいな顔をしているね。それはとっても簡単、とってもイージー、とってもシンプルな答えだよ？聞きたいかい？」
「……いい。聞きたくない。」
きっとあれだ。オレはさっき孝司に言われて寝たのだからここは夢の中なのだ。
だから、きっとここはオレの精神に近い。
つまりこいつはオレの心を読んでいるのだろう。
こいつはオレにとって天敵の様だ。
「うん。そうだね。…あれ？何か天敵って何かこう……良い感じがする！」
オレは二度目の質問をした。
「お前は…何だ？」
「またその質問かい？……敵ではないよ。でも、味方でもない。…いうなればただの《助言者》さ。ほら、よくＲＰＧにいるだろ？村人Ａみたいな……うそうそ、冗談だって。でも助言者なのは本当さ。」
「…保留。」
「本当に！？やった！ありがとう！うれしいよ！」
「やっぱ信じな「ごめんごめん。ちょっとはしゃいじゃった。」……」
ｎａｇｉは反省したかのように縮まった。
このままでは埒が明かないのでオレは質問することにした。
「…じゃあ、聞かせてもらおう。…あのロボットは何だ？ここはファンタジーの世界じゃないのか？」
「一度に二つも聞くなよ……第一の問、あのロボットは通称《魔戦機》。人が作り出した魔力で動く巨大な兵器さ。第二の問、もともと誰もこの世界――《アストラル》はファンタジー世界だとは言っ

ていない。」
ま、大抵基本はファンタジーだけどね。とｎａｇｉは言う。
――たしかに誰もこの世界がファンタジーだとは言っていない。
だとするなら、
あの魔戦機とやらにも説明がつく。
……？
…魔力で動くだって？
「君は頭が固いんだねぇ。確かにファンタジーとは言っていないとボクは言ったけれど、違うとも僕は言っていないよ。」
疑問を先に解消しようと話を進めるｎａｇｉ。
サクサク進んで大助かりだが、心を読まれるのはどうにも不愉快だ。
「仕方ないだろう？ここは君の精神世界――夢の中だよ。分かりたくなくても分かってしまうのだから、分かること前提で話を進めた方が君としても楽だろう？」
「否定は出来ないな。…で、どういう事だ？この世界は何なんだ？」
「つまりね…この世界は《魔術と科学が融合した技術があるファンタジー世界》…分かりやすいだろ？」
「とっても分かりやすい。」
「他に質問は？」
「……」
オレは少し迷ってから聞いた。
「…この世界に魔王とか人類の宿敵とかそういったのは？」
「いない。少なくとも今は、だけど。…今、この世界で戦っているのは人間同士だよ。他の異種族もそれぞれの陣営に存在する。…君らが召喚されたのは魔王退治のための勇者としてでは無いよ。」
ｎａｇｉはキッパリと否定した。
オレは次に聞きたい事を聞いた。
「僕達を召喚した所と、さっきの魔戦機の関係性は？」
「君たちを召喚したのはアストラルの五大大陸の一つ。西の《ヴァレスティア大陸》の丁度真ん中にある《テリオル王国》。魔戦機の

保有数は少ない。…まあ、平和ボケしてた国だからね。」
「…何か駄目駄目な国だな。」
「でも、とっても過ごし易い気候の国だよ。」
ｎａｇｉはまるで自分の事のように自慢した。
「…魔戦機の方は？」
「君たちを襲った魔戦機はヴァレスティアの北にある《アレオス帝国》の物さ。標準気温は軽くマイナスを超えるとても寒い所さ。でも、そこに住む人々が今日を、明日を、精一杯生きていくとても心の温まる国だよ。」
「そんな心温かい国がどうして僕達を襲ってきたんだ？」
「君だって大体は知っているだろう？セントラルキューブから歴史の読み込みは済んでいるはずだ。」
確かに。オレは言語翻訳の登録途中で転送されたがその前に歴史についてはもう知っているはずだ。
――まだ自分の記憶としては馴染んではいないが。
オレは記憶を手探りで探す。
確か帝国が王国に対して――
「帝国は最近周辺の国に対して侵略行為を始めている。もう大陸の半分を手にしているんだ。それでテリオルにも宣戦布告したんだ。確か、もうテリオルの国境付近――つまりこの神殿から北に２ｋｍ位離れた所にある《クリフの谷》って所に前線基地を建ててたかな。」
折角思い出そうとしたのに先に言われる。
オレはそこまで考えて今の説明の中の疑問点に思い当った。
「なるほどね……ところで、どうしてお前はそんな事を知っている？」
「企業秘密。知りたいならボクに対する好感度をもう少し上げてからね。」
「心配するな。お前に対する好感度は永遠に０だ。」
どうやら喋るつもりは無いらしい。

しかしなるほど。これで色々と説明がつく。
多分、オレと孝司は王国の魔戦機に乗せられて帝国軍と戦わせられるのだろう。
勿論そう思ったのには理由がある。
オレ達が召喚されたのは魔力を多く持っているらしい。
魔力を動力としている魔戦機のパイロットとしてはこれ以上にない逸材って奴なんだろう。
そして、どういった訳かそれを知った帝国側に命を狙われていると。
それに帝国からしたってオレと孝司には興味があるはずだ。
王国に行けば戦わされる。もしくは国内に縛られる。
帝国に行ったら殺される。もしくは戦わされる。
ここは王国の国境付近。
谷がこの先のオレの人生の境界線。
オレは――
「ちょっと、ちょっと。勝手に自己完結しないでよ。」
「…今度は何だ？」
折角の思考を中断された。
「これはボクからの《忠告》。君はテリオルに行った方がいい。」
「…助言じゃないのか？」
うーん。とｎａｇｉは考えるように唸った。
「帝国には…君が最も憎んでいる男がいる。そんな奴と背中を合わせるような事はしたくないだろう？」
オレが最も憎んでいる男…？
「…それは、誰だ？」
「聞かない方がいいよ。君のために、ならない…」
「それでもいい。そいつは誰なんだ？」
「……」
「…教えてくれ。ｎａｇｉ。それは誰なんだ――？」

「……君のトラウマトップ３に入る出来事の元凶となった男だよ。」

――その瞬間、オレは――

――――ダレヲオモイウカベタノダロウ？

「……もう、他に聞くことは無いかい？」

「……ああ、ない。」

そっか。とｎａｇｉは笑い出す。

「じゃあ、また今度君が愉快な危機的状況に陥った時に…」

何か言ってるが気にしない。

何せ久しぶりの普通の会話だったのだ。

夢の中とはいえ、こちら側に来てから孝司以外と会話をしたのはこいつが初めてで――――！？

「…ちょっと待て。」

「……なんだい？もう質問は無いんじゃあ…？」

「……たった今、思ったことがある。…読んでいるんだったら、分かるだろう…？」

「…いいよ、言ってごらん。」

「お前は…いや、違うな…」

「オレは何でお前の言葉が分かるんだ？」

「……フフ、」

その瞬間、こいつは、ｎａｇｉと自らを呼称したコイツは――――――

「フフフ、ハハハハハ、アハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

――――まるで壊れたレコーダーのように笑った。

「…！？」

「アハハハハハハ、アハハハハハ。……今更！今更気づいたのかい？遅いよ！その質問が最初だと思ったのに！」

「……」

「ハハハハハ。……そう。……今君が考えている４つの可能性。その内１つが大正解！」

――オレが考えた４つの可能性。

1つ、この世界には《精神干渉》系統の魔術が存在し、それらを神殿からここに至るまでにオレが受けた可能性。もしくはファルナ達がオレに使った可能性。
「うわ、さっきまで仲よくしてたのに候補に挙げるのかい？」
この世界にそのような物があるかどうかは分からないがこれは無いと思う。
ここに来るまで会ったのは狼、甲冑兵士二人、ファルナ達だ。
「あとボクね。直接は会ってないけれど。」
まず、狼。論外。
次に兵士。あいつらは炎とかしか撃ってこなかった。よって除外。
ファルナ達。これは矛盾する。
なぜなら、そんな物があればそれでオレと意思疎通を図ればいいのだから。
だから、
「そう。それは違うよ。」

2つ、実はオレは二重人格者でこちら側に来た際、もう一つの人格が目覚めてオレを助けている可能性。
「君…そんな痛い子だったんだ…」
ハッキリ言おう。ふざけんな。
「ひど！」
オレにとっての《僕》は人とのコミュニケーションのための仮面だ。別人格なんかじゃない。
「その仮面付けてても人との間に信頼関係は築けないんだね…」
それにこんな奴がオレの別人格だったら今頃自殺している。
「うわー。すっごい傷ついた。」

3つ、カレンさんみたいなイレギュラーの可能性。
「ああ…彼女ね…ああいうのはイレギュラーの中のイレギュラーだよ。ボクに関して言うならああいったケースは無い。」

「お前が否定してくれて確信した。」
これに関しては否定材料がない。
「……否定、ね……」

だから、４つ目。
そう、これが答え。
「そのとおり。それが正解だよ。」
コイツは、

「では、もう一度挨拶しよう。初めまして《後輩君》。訳あって本名は明かせないから今まで通りで呼んでくれればいいよ。」

コイツは、オレ達と同じなんだ――――

今、思えばおかしかった。
ｎａｇｉは自らを《助言者》といった時にＲＰＧを例えに出していた。
大抵異世界の基本はファンタジーだとも。
普通はそんな風に例えない。
そんな事、ここと違う異世界から来たっていう何よりの証明じゃないか！

「…それじゃ、さようならだ。月神俊輔。いずれまた君がこの世界の《真実》を知ろうとするまで…」
「まて！ｎａｇｉ！」
――――折角見つけた帰るための手がかりなのに！
「お前は、帰る方法を知っているのか！」
「…さあね。知っているかもしれないし、知らないかもしれない。」
「はぐらかすな……！「いいのかい？君の友達の孝司君だったっけ？君を起こそうとしているよ？」…チッ！」
オレが舌打ちするとｎａｇｉはやれやれといった様子で言う。
「心配しなくてもいい。月神俊輔。君が生きていればボクらはまた逢える。だから、」
「……だから…？」

「だから――――死なないでほしい。そして、諦めないで欲しい。どんな不条理にも、どんな理不尽が立ち塞がっても。そうすれば、君の《牙》は届く。きっと届くはずだから――――」
「……《牙》？」
一体何の事だ？
「これは約束だ。またいずれボクは君の前に姿を現す。その頃には君はもうボクの事を信じてくれないかもしれない。でも、ボクは必ず君の前に現れるよ。だから約束してほしい。諦めないって。」
「……元から信じちゃ、いない…」
「それでもだよ。それでも約束してほしい。」
「……ああ。約束、しよう。」

――約束の仕方なんてもう忘れてしまったけれど――――
「いい返事だね。……それじゃ、また。」

「ああ。また、な…」
ｎａｇｉの周りが歪んでいって、
そして、オレは、僕は――――

◇

「……あ……」
「起きたか。…大丈夫か？気分悪そうだぞ。」
「……ああ。大丈夫…うん。」
そうか。と孝司はそれ以上何も聞かずにいてくれた。
ありがたいな。と僕は思った。
「見えるか？向こう側の草むら…」
孝司が遠くの草むらを指差して言う。
草むらの所にはさっき僕らを追いかけて来た兵士たちがいた。
あいつが――ｎａｇｉの言ってた事が正しければ《帝国》の兵士だろう。
まだ僕らを探しているみたいだ。
「…どうする？」
「どうするもこうするも見つからないように逃げるしか…」
僕達が悩んでたその時、
「ガルルルル……」

さっきの狼っぽいのが――もう狼でいいや――僕の真横に来ていた。
「……」
「……」
「グルルルル…」
わあ、とてもお腹が減ってそうだよ。
危ないなぁ。あはははは。
「…孝司？何か食べ物持っていない？」
「…昼飯の時に食ったサラミが２本。」
「一本頂戴。」
「……死ぬなよ。」
死ぬか。と僕は言葉を返した。
僕はサラミを一本受け取ると狼に差し出した。
頼む。これで向こうに行ってくれ。
「……」
狼はサラミを咥えて茂みの向こうに行った。
「…間一髪セーフ。」
「いや、アウトかもしんない。」
え、と僕が振り返ると――

「……」
「……」

兵士たちがこっちを凝視していた。

うん。これは、その、あれですな。

どうする？どうするよ僕！

第四話　仮面被りと光の助言者／Ｌｅｔ’ｓ　ｑｕｅｓｔｉｏｎ！

ｅｎｄ

⇒ｎｅｘｔ　ｓｔｏｒｙ　人生はライフカードでは選べない／一つの無関係な命が消えた時

第一章　第四話　仮面被りと光の助言者／Ｌｅｔ’ｓ　ｑｕｅｓｔｉｏｎ！（後

今回は前回の最後辺りに出てきた謎声
自称ｎａｇｉとの質疑応答となりました第六話です。
ええ。俊輔に戦闘フラグ立てましたとも。
次回は戦闘ですよ。はい。
さて、今回から後書きにちょっとした小芝居があります。
それらも含めたりして感想お待ちしています。
では、興味のある方だけスクロールどうぞ。

――猟犬の楽屋裏――
俊輔「ふう。やっと第六話まで進んだか。」
孝司「しかしあれだな。設定に無理があるというか…これしっかり伏線回収出来るのか…？」
？「ふふふ。それは心配いらないさ。…多分。」
俊輔＆孝司「「な、なんだ！？」」
？「ふ。なんだかんだと聞かれたら…」
俊輔「……」
孝司「……」
？「……」
俊輔「…乗ってあげないからな。作者。」
島凪（作者）「ばらすなよ！？あと乗っかれよ！」

孝司「……かっこいい。」
俊輔「…は？」
島凪「やっぱお前には分かるんだなぁ。よし、孝司は今度にしといてあげよう。」
俊輔「何の話だよ…」
島凪「ん？インタビュー。」
孝司「じゃ、俺は行くわ。達者でな俊輔。」
俊輔「ちょ、待て…孝司！」
島凪「ふふふ。では最初のクエスチョン！」
俊輔「はぁ！？」

島凪「…ぶっちゃけ、君本当に主人公なの？」

俊輔「お前がそう書いているんだろう！？」

continue．．．

いや、ただロ○ット団が気に入ってるだけですよ？

第一章　第五話　人生はライフカードでは選べない／一つの無関係な命が消えた

さて、今回は注意（警告）があります。
まずは、前回の最後から俊輔・孝司は二手に分かれて逃げています。
兵士たちも二手に分かれ追っています。
今回はその後からの物語となっています。
あれ？どうしてそんな事に？と思った方。思わなかった方。
申し訳ありません。私の描写不足です。
時間があったら後日、修正という形をとります。
次に、孝司視点で新出用語が多数出てきます。
混乱する箇所があるかもしれません。
先にお伝えしておきます。
最後に、俊輔視点の最後に若干鬱になる恐れのある個所があります。
お気を付けください。

第一章　第五話　人生はライフカードでは選べない／一つの無関係な命が消えた

「……終わりましたね。これで全部ですか？」
「はい。しっかり五機の破壊を確認しました。」
「……これは少しやりすぎたかもしれません。…カレン、被害状況を。」
「装甲に軽微の損傷を確認。それと右腕部マニュピレータに機能不全の兆行が現れています。」
「…私が聞きたいのはそうではなくて…」
「神殿の損壊は計算してざっと１８億Ｇ（ガラー）です。」
「……テリオルの財政が傾いてしまうではないですか！」

ファルナ達は崩れ落ちた神殿内に立っていた。
周囲にはまだ火がくすぶっている。
そして彼女達の近くにあるのは、
瓦礫、残骸。そして――――

――見上げるように高い、この場の何よりも赤い、朱い、紅い――
紅の機体だった。

人型で、重装甲とまではいかないが分厚い装甲を纏っており威圧感を感じさせている。
他の所は火がくすぶっているものの、その機体の周りだけがまるで蜃気楼のように揺らめいている。
それに何より異常なのがこの機体の装備だった。
背中に二本、腰に二本、左腕部の肘から下に一本の計五本の剣を納める鞘があり、
それに呼応する西洋剣が左腕部以外収められている。
左腕部の剣は右手で抜き放たれており、それら以外に装備が見当た……

らなかった。

「またアリアとエルネット財務大臣に怒鳴られます！」

「仕方ありません。…ファルナ様、アリア様の事が呼び捨てになっていますが…」

「構いません。こんな時くらい呼び捨てにさせなさい。…仕方ないってどういう意味ですか？」

「ワタシと《契約》した事です。《ソードイフリート》はただでさえ火力が他の《魔鋼機》と比べて高いのですから…」

「…はぁ。それもそうですね…」

そう言ってファルナは目の前の巨人――ソードイフリートを見上げる。

その姿には諦めと、後悔と、哀愁が漂っていた…

「…私、次期宮廷魔術師長なのになんで剣を振るっているのでしょう…？」

「マスター。ソードイフリートはそういう機体なんですよ…伊達に名前にソードは付けてません。と言うか、名前がソードイフリートなのに剣を振らずに魔術撃ってたらおかしいでしょう。」

「そんなものですかねぇ…」

ファルナは振り返るとカレンに神殿の外を指差しながら言った。

「それじゃあ、お二人を迎えに行きましょう。そろそろ日が暮れてしまいますし。」

「ええ、行きましょう。何事も無ければいいのですが……？……っ！ファルナ様！」

「？…どうかしましたか？」

「申し訳ありません。…一機、仕留め切れてなかったようです。」

「……何ですって？」
太陽はもう、傾き始めていた――

◆

くそ、と心の中で呟く。
俺の目の前には鎧を着た兵士が一人。
全身を包み込んでいるその鎧には――当たり前だが――俺の持っている警棒では傷一つ付かない。
しかもこいつが振っているのは間違いなく人一人殺せてしまうような幅広の剣だ。
命のやり取りなんて俺はしたこと無い。
――あいつなら経験済みなんだろうが…
そうこうしている内に兵士の剣が下から跳ね上げるように俺の首を狙ってくる。

「うおらっ！」
「うおっ！」

それをバックステップしながら首を捻って避ける。
急いでそのまま距離をとって体勢を立て直した。

「まずいな…」

このままじゃ消耗戦だ。
スタミナ削られてこっちがやられちまう！

「……やるじゃねえか、兄ちゃん。」
「昔っから厄介事に巻き込まれててね…」

主に俊輔(アイツ)のせいだ。
昔からアイツがトラブルの類を引き寄せている。
この警棒だってアイツと日々を過ごすために必要だっただけだし…

「それでも大したもんだぜ。普通、召喚したてでそんなに動けるヤツぁそうはいない。」
「そうなのかい？」

兵士と喋りながら息を整える。
――さっきからこれの繰り返し。いい加減、こっちが参っちまいそうだ。
すると兵士がいきなり兜を脱ぎ捨てて素顔を俺に見せた。
４、５０歳くらいの髭をたくわえた茶髪のオッチャンだった。

「へへ、これで対等だろ？」
「んな訳あるか！」

こっちは学生服と警棒。あっちは鎧と剣だぞ！
兜外したくらいで対等まで持って行けるか！

「まぁまぁ。…ところで兄ちゃん。聞きたくないかい？」
「何をだよ。」
「どうして俺達が兄ちゃん達の事を殺そうと追うのか。」
「それは…」

それは何だろう？
ファルナ達は俺達の事を《魔力保有量》とかいうのが高いから召喚したって言ってた。
そもそもの問題でその《魔力保有量》というのが分からない。

多分その人物の持つ魔力が高いみたいな意味なんだろうけれども…

「……魔力が高いから？」

「その答えだと５８点くらいだな。」

以外と厳しい採点基準だった。

俺は立ち位置を考えながら時間稼ぎのためにそのまま話を続けた。

どういうつもりなのかは分からないが、好都合だった。

「じゃあ、何なんだよ？」

とりあえず隙を窺って一気にケリをつけるしかないか…？

「兄ちゃん達が優秀な殺戮人形（キリングマシーン）になれる素質があるからさ。」

……は？

何だよそれ。意味分かんねえ。

「意味分かんねえよ。俺達はつい数時間前まで平和な一般人の生活を送ってたんだぜ。それがどうしてそんな事になるんだ？」

「……もしかして何も聞かされてないのか？」

「聞かされるも何も、さっきまで一緒にいたアイツがちょっと事故ってこの世界の言語が分からなかったから…」

言ってすぐに余計な事まで言ったと思った。

だけどオッチャンはそこには全く触れずに俺に言う。

「…すまない。俺たちゃ、てっきりもう知ってて王都に行くもんだと…」

「そんな事どうでもいいから教えろよ！どういう意味なんだ！」

「……説明してやる。ちょっと俺達《帝国》寄りの伝え方になっちまうが…」
「それでいい！教えてくれ、オッチャン。」
「…兄ちゃん。まず自分たちの事と魔力について知っているか？」
いきなり意味の分からない質問をされた。
魔力についてはチンプンカンプンだが自分の事が分かんない奴なんていないだろう。
「魔力に関しては全然。俺達は《魔力保有量》とかいうのが高いとかしか…」
「その様子だと《異邦人》についても知らないみたいだな…よし。」
オッチャンは剣を逆手に持つと地面に図を描き始めた。
「…何してんの？」
「分かりやすいように図で説明しようとしてんだよ。」
そうして描いたのが横一列に並んだ三つの丸と棒人間に二体の人型のロボットの絵だった。
…もしかしたらオッチャン、絵が上手いのかも知れない。
「よし。…じゃあ、説明してやる。まずは《魔力》についてだ。」
オッチャンはそう言って横に並んだ三つの丸の内、一番左端を剣で指した。
「魔力っていうのは三つあるんだ。いいか？順番に言っていくぞ。
…こいつが《オド》。こいつは生きている全ての生物に宿っているんだ。俺や兄ちゃん、さっきの坊主だってそうだ。」

坊主ってのは俊輔の事か。
次に、とオッチャンは右端の丸を指す。
「こいつは《エーテル》。魔術全般に使われている。兄ちゃん達に最初に会った時、手から炎を出したろ？あれはエーテルを術式で編んで操作した物だ。」
ああ、あれの事か。
かっけぇ！ってはしゃいでたら俊輔に殴られたな…
最後に、とオッチャンは真ん中の丸を指す。
「これが《マナ》。世界中にある。空気みたいにな。兄ちゃん達が召喚された時に使われたヤツだ。」
これら全てを大概《魔力》って言うんだ。とオッチャンは言う。
確かにためにはなるがまったく説明になってないんじゃあ？
「魔力については分かったけれどよ。まったくさっきの言葉の説明になってないぜ？」
「あせんなよ。まだ魔力について半分も終わってないぜ。」
うえ、マジかよと思いながら俺は思った。
――俊輔…お前今どんな状況なんだ……？
ここは違う所でもう一人と戦っているだろう悪友の心配を――

◆

走る、走る、走る――――
目の前を邪魔する木の枝を両手で毟り取るようにへし折りながら、

後ろにいるであろう帝国兵に投げる。
――もうさっき別れた所からどれくらい離れてしまっただろうか。
ただ体力の続く限り逃げる。
何よりアイツと約束してしまった。だったら諦める訳にはいかない。

「――ッ！しつこいんだよ――お前ッ！」

急停止して右に回転し、そのまま左足で回し蹴りをする。
この道は高低差も無くて狭い道だから、これで距離を稼げるはずだ
――――！

「――――っ！」

前方への加速力と右回転したことによる遠心力を乗せた僕の一撃は
難無く右手の籠手で防がれる。
でも、その時の反動を利用して距離をとる。

――――逃げられない。
それが分かったのか、向こうも剣を構えた。

「……剣…だったらいけるかな……？」

僕はボソッと呟いて今の僕の手持ちを見る。
両手のグローブと、懐中電灯、財布に、携帯、鞄。
鞄は学ランの下に挟み込むように入れてる。急造の防具だ。…意味
無いけど。
懐中電灯はベルトに挟み込んでいるが使い道はないだろう。
財布と携帯。これは一瞬気を逸らすくらいにはなるか…？
このグローブなら手の甲の辺りにつけられた何かの合金で剣を…防
げないな。出来て逸らすくらいか。

手持ちで倒すのは無理。だったらやっぱり孝司やファルナさん達が助けに来てくれるまで待つくらいしか――――ッ！

「っ！考える時間くらいよこせよ…！」

踏み込みながら縦に振り落とされた剣を、体を左にずらすことで避ける。

続けて繰り出された右からの薙ぎ払いをバックステップで避け、その後の突きを紙一重でかわしながら踏み込んでタックルする。

「ぐっ…がは、ごほっ。」

「ハァ…はぁ……っ…はぁ…」

どうやら今のタックルが相当効いてしまったようだ。

それはそれでラッキーだがこっちも正直言ってヤバイ。

何がってアドレナリンが何か凄いことになってる。多分。

あんなに暴れてもスタミナが尽きない。

きっと一息ついたら、もう動けなくなるだろう。

こういうのは経験積みだ。

今は平気だと思っててても後からやって来る。

――明日は筋肉痛かな…

明日が来るかも分からないのにそんな事を思った。

◆

さて、魔力についてオッチャンの補足説明を簡単に説明しよう。

先程の《オド》《マナ》《エーテル》。

これらは全て変換できるらしい。

具体的にこうだ。

オド⇔マナ⇔エーテル

オドからエーテル、エーテルからオドには変換できないらしい。
そしてオドからマナへの変換。
これが《魔力保有量》とやら深くに関わるらしい。
通常、オドには個人差があって訓練したりすれば増えていくんだとか。
余談だがファルナはあの中でもかなりの実力者らしい。
彼女も辛い訓練を経たんだろうか……？
……閑話休題。
ともかくオドの量は人それぞれ。
そしてマナはオドを練って自身の外に放出されたものらしい。
オドからマナへの変換にはまた人それぞれの倍率があるという。
それを《魔力変換倍率》なんて風に言うんだとか。
この《魔力変換倍率》も訓練で鍛えられるが、余り伸びないらしい。
オドの量と魔力変換倍率。
この二つを計算して求められたのが《魔力保有量》ってわけだ。
ちなみにこの計算において重要視されるのは倍率のほうらしい。

「……分かったか？つまり兄ちゃん達は一のオドから十のマナを出せる優秀な人材って訳だ。次、説明するぞ。」

オッチャンは今度は二体の人型ロボットの内、片方を指した。
――――今度はロボット……？
俺の脳裏に儀式の最中に現れた四足歩行のロボットが浮かぶ。

「こいつは通称《魔戦機》。魔力で…いや、マナで動く兵器だ。…兄ちゃんは見ただろう？」
「ああ……あんなもん生身の人間に向けて撃つなよ……」
「エーテルカノンの事か？俺らだってあんなもん喰らいたかぁねぇよ。」

オッチャンは気まずそうな顔をする。
あれ、何か俺悪いこと言ったかな……？

「……まあ、もう分かるだろうが兄ちゃん達を乗せたらこれはスゲェ武器になる。何せとてつもない量のマナを出せるんだからな…でも、それはスペック上での事だ。兄ちゃん、さっきの俺が言った武器の名前言ってみな。」
「……《エーテル》、カノン……？」
「そう、それだ。じゃあちょっとばかし別の話に移るぜ。」

そう言ってオッチャンは棒人形に剣を向ける。
……あれ、何か俺の方が剣を突き付けられているような気がする…

「これが……兄ちゃん達、異世界の人間。俺達、《アストラル》の人間からは《異邦人》って呼ばれている。」
「異邦人……？…エイリアン？」

何かエキサ〇ト翻訳みたいに訳してみた。
言いようとしちゃ合ってるのかもしれない。

「意味分かんねえが…話、続けんぞ。」
「分かった。」
「異邦人は選出のシステムからして保有量が高い。つまり、パイロットとしては最適だ。だが……」
「だが？」
「異邦人には俺達からしたら決定的な欠陥がある。」
「欠陥……？」

欠陥って何だろう？
さっきのオッチャンの質問を思い出せ……

魔戦機に乗せれば《スペック上は》強くなるらしい。
そしてオッチャンに訊かれた武器は《エーテルカノン》。
……まったく噛み合わない。
ん？待てよ…エーテルカノンって名前なんだからエーテルを…撃つのか？

「……異邦人はマナをエーテルに変換できない。」
「は？」
「変換だよ、変換。異邦人はエーテルを扱う事が出来ないんだ。…ここまで言えばあとは分かるな？」

エーテルが、扱えない。
それはつまり――――

「そう。兄ちゃん達が乗れば魔戦機は飛び道具は持てない。いや、もしかしたら武器そのものを扱えないかもしれない。最近はほとんどエーテルで剣も構成するからな。」
「ちょっと待てよ。だったら武器そのものにエーテルを積んでおけば…」
「駄目だ。兄ちゃん、人の魔力で使った方がいいんだよ。」

訳分かんねえ……
人の方がいいってどういう意味だ？

「…兄ちゃんは走ったら疲れたら、止まって休むだろう？」
「当たり前だろ。じゃなきゃまた走れないじゃないか。」
「そう。そこだよ兄ちゃん。休んだら走れるんだよ。……魔力についての補足だ。オドは体力と言ってもいい。つまりな、オドを回復できるんだよ。時間経過でな。そして、オドはマナに変換できてマナは動力だ。…分かるか？」

「……動力がチャージできる…？マナはエーテルにも変換できるから持っている武器にもチャージできる？」
「そういう事さ。でも兄ちゃんじゃただ速く、長く走っていることしか出来ない。」
「でも、それじゃあ……」
「そう。兄ちゃん達の意味がないよな。魔術が使えない。機体の武器が使えない…だからほら、これで最後の説明だ。」

オッチャンはそう言うと最後のもう一体のロボットの絵に剣を突き刺した。
その動作には若干の怯えと恐怖を感じさせる、そんな動きだった。

「……さっきオドは変換してマナになって放出される。って言ったよな。」
「ああ。オドを練ってマナにして放出するんだよな？」
「ああ、そうだ。でも良く考えてみな？自分の中にあるものには人は手出しできないが、自分から離れたものには他人でも干渉できるよな？」
「ああ。自分で大事そうに何か持ってたら他人は触れられないけど、そこら辺にあったら誰でも触れる…」
「そうだ。……こいつが兄ちゃん達を殺戮人形にしてしまうかもしれない存在だ。」

オッチャンは忌々しそうにその単語を俺に言う。

「……《魔鋼機》。…俺達はこいつをそう呼ぶ。」

◆

「ヌウ…オラァ！」

「――――ッ――――ハァ！」

袈裟切りをかわしてカウンターに蹴りを入れて引き離す。
――――剣を避けるのは簡単ではない。と言うかヤバイ。
所詮は剣。攻撃は自ずと線と点になる。
つまり斬撃と刺突になる。
斬撃は手と剣を見れば予想つくし、刺突は大きく引いたらそうだと分かる。
だから避けるのは簡単…ではない。
僕の体がその予想についてこない。
認識してから行動までのタイムラグがあるのだ。
そのせいでもう何回か掠ってる。
しかもこっちは拳撃、蹴り。打撃なので鎧には大した効果は無い。
このままじゃ間違いなくこっちのパワー負けになるだろう。
とはいえ、勝機はある。
さっきのようなタックルを繰り返せば鎧の中でも衝撃は伝わる。
問題は……

「…そんな事をする暇がない――――っ、このっ――――！」
「ハァァァァッ――――！」

放たれた逆袈裟切りをワンテンポ遅れてバックステップしてかわそうとする。
が、かわしきれずに学ランとその下の鞄を斬られる。
――――皮膚には届いてない……！

僕は学ランを脱ぎながら、鞄を兵士に向かって投げつける。
それを左手で払われる。
ここまでは予想通り。
僕は学ランの両袖を持って巻き取るようにして剣を押さえる。

剣さえ封じてしまえば向こうは必殺の一撃を放てない……！

「よし――――！」

そのまま一緒に遠くへ投げ捨てようとするが、

ビリリリィィィ！

学ランを切り裂かれた！？

くそ、予定外だ。距離を置いてひとまず息を――――――！？

「な……？」

ガクンっと僕の膝が折れる。

――――――もう、限界か――――――？

「これが……ラストチャンス……！」

これを崩されたらもう逃げるしかない。

僕は右から剣を水平にして突き出された突きを、剣の腹を右手の甲で弾くことで逸らす。

剣先が上に逸れて相手はがら空きになる。

「――もらった！」

踏み込みながら相手の背後を見る。

幹の太い樹があった。

あんなのが後ろにある状態でさっきのタックルを喰らえば意識くらいは奪えるんじゃないだろうか。

こちらの技に自信があるわけでは無いけれど、それくらい期待した

っていいはずだ。

右足で踏み込んで肩から思いっきり体当たりを――――――！？

左手から煌いた銀色の光を上体を無理やり動かすことでかわす。

今のは、

「投げナイフ（スローイング）――――――！？」

そのまま背中をつける形に倒れる。

すぐに起き上がろうとするが――

「がっ……」

勢いよく腹を踏まれる。

そのままヤツは僕の頭に剣を――――――

「――――――諦められるかぁ――――――！」

勢いよく起き上がって顔面目掛けて殴りつける。

もちろんほとんど意味は無いし、こっちだって痛い。

でもそれでいい。

「うおおおおおおおおっ！！」

そのまま兵士に背を向けて逃げ出す。

とにかく広い所に逃げられれば……！

◆

「魔鋼機？魔戦機とは違うのか？」

俺はオッチャンに質問する。
俊輔が昔、『人の話を鵜呑みにしちゃ駄目だ。』って言ってた。
それは真実は人の数だけあるから、たった一人の真実で判断するな。
って意味でアイツは言ったんだっけ……？

「大体は同じだ。魔鋼機ってのは魔戦機の複座型みたいなもんだ。
一人が操縦を担当して、もう一人が機体のマナ、エーテルを制御する。兄ちゃん達は操縦だな。もう一人の方が兄ちゃん達の放出したマナをコントロールするって事だ。」
「なるほど…確かにそんなもんに乗せられたら一騎当千の兵士ができちまう。」

それが俺達が襲われる理由か。
でもどうしてオッチャンはそんな怖そうにしてんだ？

「…こっからは余談だ。余談だが…重要な事だ。……魔鋼機のサブパイロットって奴らについてだ。」
「……？何か違うのか？」
「ああ。兄ちゃん、魔鋼機ってのはな自己再生するんだ。人間のようにじっくりと、時間をかけてな。もちろん動力はマナだ。分かるかい？」

分かるか？って分かるわけが…
ん？でもさっきのオドは体力。みたいな言葉と合わせると…？

「魔鋼機は、人間なのか？」

自分で言ってみて突拍子のない言葉だと思った。
でも、ここは異世界。

もう俺の、俺達の常識じゃ測れない。
だったら突拍子でもなんでもいいから考えた方がいい。

「８０点。魔鋼機は人じゃない。ただそれに近い答えだ。」
「…じゃ、何なんだ？」
「《コアドール》って奴らがいる。性別、生まれ、性格。あらゆることが違うが、ただ一つだけそいつらに共通していることがある。それが魔鋼機のパイロットだって事だ。」
「……それじゃあ。」
「ああ。魔鋼機はコアドールと命を共有してるんじゃないかって話だ。」

何か色んなことを知りすぎて頭がこんがらがってきた。
俺はどうすればいいんだ……？

「そこでだ、兄ちゃん。そのまま王都に行くと戦わせられる羽目になるかもしんねえ。俺達の、《帝国》の方に来ないか？」
「嫌だね。」

驚くくらいすんなり言葉が出た。
でもオッチャンには悪いけど俺は――――――
「俺の大事な《悪友》を殺そうとしたんだ。ついていける訳無いだろう――――――！」
――――そうキッパリと決めたんだ。

◆

「……ふぅ、はぁ。」

なんとか一息つけた。
でもすぐに見つかるだろう。
周りは木を伐採したみたいに開けていて、見つかりやすいがこっちも見つけやすい。
もう太陽は――――――思ったけれどこれは太陽なのかな？――――隠れてしまっている。
地平線近くまで沈んでいるんだろう。森で見えない。
とにかく休憩しないと……

「……驚いた。こんな近くまで忍び寄ってきてたんだね。」

首筋に冷たいものが当てられる。
――――鈍く銀色に輝く剣が当てられていた。
……チェックメイト。
もう逃げられないし、抵抗できない。

逃げる気も無いし、抵抗する気も無かった。

思いっきり背中を蹴られる。
回転しながら倒れる。
目の前には剣を振りかぶった兵士がいた。
そのまま今度こそ脳天目掛けて振り落とされ――――――

――――――世界がスローモーションになった。

だからって僕が速くなった訳じゃない。

これは、走馬灯のようなものだ。
だから少しずつ近づいてくる死をよける事は出来ない。
そう。だからこれは、懺悔の時間なのだ。
僕が、生きている人に。
死んでしまった人に。
これから出会ったかもしれない人に。

そんな人たちに対する――――言葉を贈る。
これはきっと――――そんな時間。
――――それじゃ、始めよう。

まずは、僕がこれから出会ったかもしれないあなたに。
――――ゴメンナサイ。もしかしたらあなたの事を、僕は信頼できたかもしれない。

次に、生きている人達に。

まずはファルナさん。
――――ゴメンナサイ。実は君の事はコレっぽっちも信じてなかった。
もしかしたら、もっと君と話せれば……僕は君の事を信じる事が出来たのかもしれない。

次に、祖父ちゃん。
――――ゴメンナサイ。もっと僕がうまくできれば僕はここで死ななかったかもしれません。
もしかしたら、祖父ちゃんから技を教えてもらえたかもしれません。

それと、ｎａｇｉ。
あんなに諦めないって約束したのに結局、僕はこの程度の人間だったんだ。
こんな僕が、約束なんて守ることすらできないこの僕が――――――
――――ゴメン。結局君に逢う事は出来なかった――――――

それから、孝司。
――――君は、お前は僕の最高の《悪友》だったよ。
――――ゴメン。結局最後までお前を《親友》だと思う事は、出来なかった。
――――十年前、お前がいなかったら僕は――――――

最後に、もう逢えない、もう逢うことのないあなたたちに――――――

父さん、ゴメンナサイ。
僕は佑香を護れなかったよ。
僕は父さんとの約束を守れなかったんだ。
あの時、僕は父さんと約束したのに。
佑香を護るって約束したのに。
絶対に、護るって約束したのに――――――――！

母さん、ゴメンナサイ。
僕はここで死んでしまうみたいです。

僕は母さんとの約束も破ってしまうみたいです。
あの時、約束したのに。
生き残ってみせるって約束したのに。
絶対に、生きるって約束したのに――――――！

佑香。ごめんな。
兄ちゃん、もう駄目みたいだ。
佑香は――――――
佑香は兄ちゃんの事、怒ってくれるかな？
佑香は兄ちゃんの事、恨んでいないかな？
佑香は――――――こんな兄ちゃん、許してくれるかな？

最後に。
本当の最後に。
本当の、本当の最後に君に、■■に言いたいな。
――――――そして、聞きたい。

――――――僕は、生きていていいのかな？

――――――僕は、生きてて良かったのかな？

――――――僕は、死んだ方がいいのかな？

――――――僕は、死んだ方が良かったのかな？

――――――僕は、幸せなのかな？

――――――僕は、幸せだったのかな？

――――――僕は、幸せになれたのかな？

――――――君は、生きていて楽しかったかな？

――――――君は、死ぬべき人間だったのかな？

――――――君は、幸せだったのかな？

――――――君は、僕と、オレと一緒に過ごして楽しかったのかな――？

もう、答えは返って来ないけれど――――――

最後に――――――それが――――――

――――――知りたかった。

結局、何も変わらなかった。
結局、僕が死んでも変わらない。
僕という存在が欠けても、変わらない。
たとえ異世界でも――――――変わらない。
無慈悲なまでに、変わらない。
世界（オレ）は、変わらない。
まるで――――鏡だ。

――――頭上に煌めく銀色の光。
僕は、そんな瞬間にも目を瞑ることが出来なくて――――――

――――――僕（セカイ）の視界は、真っ赤に染まった。

第四話　人生はライフカードでは選べない／一つの無関係な命が消えた時　ｅｎｄ
⇒Ｃｈａｐｔｅｒ　１　Ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ　ｓｔｏｒｙ　終わりも突然やってきた／夕焼けの向こうの彼女と血塗れた僕

第一章　第五話　人生はライフカードでは選べない／一つの無関係な命が消えた

さて、何か俊輔ＤＥＡＤＥＮＤっぽい終わり方になってしまった第五話。

■はあなたの事ではありません。いちおー俊輔のトラウマに関わる人物です。

ちなみに今回、俊輔視点の途中途中のあれは（一応）戦闘シーンのつもりです。

……ｍｙ主人公、お前は何時になったらロボットアクションをするんだ……？

後、サブタイの無関係な命って何だよ？って方。

御心配なく。一見誰も死んでなさそうですが次回に分かることでしょう。

（実はあまりに長くなりすぎたから次回にカットしました。）

次回は第一章の最終話とエピローグ。幕間の三話同時更新です。

今回は書き方を若干変えました。

具体的に言うと、地の文と会話文の間に一行分空白を入れました。

これについてのご意見・ご感想。

それ以外についてもお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4277i/

Howl of hound

2010年10月8日23時38分発行